

| | | | |
|---------------|--------------------------------------|------|--------|
| 派遣者番号 | 29K25 | 氏名 | 友廣 幸樹 |
| 研究主題 —副主題— | 小学校社会科における「学びのユニバーサルデザイン (UDL)」の授業実践 | | |
| 派遣先 | 早稲田大学教職大学院 | 担当教官 | 高橋 あつ子 |
| 所属校 | 国立市立国立第三小学校 | 校長 | 根本 哲郎 |

キーワード：学びのユニバーサルデザイン 学びのエキスパート 小学校社会科

1 研究の背景 (目的)・主題設定の理由等

これまで都内公立小学校で通常の学級の担任を経験し、授業技術向上のための研修、教材研究を中心とした指導案作成や授業研究などに取り組んできた。授業規律の確立、ノート指導、教材解釈に基づく教材開発や教材研究、問題解決的な学習過程を意識した授業展開、様々な学習活動を取り入れた指導方法などにおいて、一定の成果を実感できるようになってきた。

一方で、学習者の学び方は多種多様であり「指導計画が“平均域”の学習者に合わせてデザインされていると個人差に対応できない」という課題を感じてきた。

また、「合理的配慮」や「インクルーシブ教育」の視点による研修経験を通して「一部または個別の学習者を対象とした配慮や支援は、他の学習者にとっても有益である」という場面に何度も遭遇してきた。あらかじめ学習者の多種多様な学び方に応じた授業展開・学習方法・学習教材等を用意し、全ての学習者がアクセスできるような指導法の必要性を感じてきた。

そこで、アメリカの民間の教育研究開発組織であるCAST (Center for Applied Special Technology) が提唱する「学びのユニバーサルデザイン (Universal Design for Learning: 以下、UDL)」に着目した。「全ての学習者のニーズに合った教育をどのようにつくっていくかを理解するための枠組み」がUDLである。UDLを踏まえた授業を実施するために必要な観点については「UDLガイドライン」にまとめられている。ガイドラインは脳科学の研究を基にした3つの原則によって成り立っている。それぞれの原則は、さらに細分化され9つの観点になっている。

UDLの目的は、「学びたいという意欲をもち、方略的に学ぶ方法が分かり、自分にあった柔軟なやり方で生涯にわたる学習に十分備えられている者」である「学びのエキスパート (expert learner)」を育てることにある。UDLでは、全ての学習者がアクセス可能な学習環境をつくるために学習の妨げとなる障壁に対処し、単に特定の知識やスキルを身に付けるだけではなく、学ぶこと自体の習得を手助けすることができる。

本実践では、UDLに基づいた指導計画による複数単元の授業実践を行い、学習者の姿や指導方法の変容などから、UDL授業実践の在り方を検討することを目的とする。

2 研究の内容・研究の方法

- 対象 都内公立小学校の第6学年A組 (33名)
 時期 平成29年10月～12月のうち20日間
 実践単元 (1)「世界に歩み出した日本」
 (2)「長く続いた戦争と人々の暮らし」
 (3)「新しい日本、平和な日本へ」

(4)「未来予測年表をつくろう」

※(1)～(3)は筆者が実践。(4)は筆者と実践学級担任が共同開発・実践した授業

UDLガイドラインには、9つのガイドラインごとについていくつかのチェックポイントが補足されている。

本実践において筆者はUDLに基づいた実践に初めて取り組んだ。そこで、本実践では全てのチェックポイントに網羅的に取り組んでいくのではなく、学習者の様子に合わせてチェックポイントを基に必要な支援を加えていくようにした。

3 研究の結果

単元ごとに振り返りと改善を行い、実践を重ね、全授業終了後に4つの段階に分類した。(表1)。

表1 UDL 授業実践の4フェーズ

| | |
|------|-------------|
| 第1段階 | 選択・見通し・振り返り |
| 第2段階 | モニターの指標を追加 |
| 第3段階 | 指標の内容を吟味 |
| 第4段階 | 協働と学習者集団を育む |

【授業実践の実際】

第1段階 選択・見通し・振り返り

(1)ガイドラインに基づく支援

事前訪問における実態把握、UDL実践の先行事例、教職大学院での学びを基に、まず初めに取り組む支援として以下の3点を設定した。

- ア 選択 (学習教材、学習形態を自己選択できるようにする)
 イ 見通し (単元全体、1単位時間の学習の見通しをもてるようにする)
 ウ 振り返り (自己の学習の振り返りを行い、次の学習に生かせるようにする)

「学習計画」と「振り返り」が一体化した振り返りシートを作成した。毎時間「学習の達成度」「学習への取組」を5段階で自己評価するとともに、自分の学び方について記述して振り返ることができるようにした。

(2)学習者の様子

学習者は、自分に合った学習教材や学習形態を選択しながら取り組むことができた。また、調べ学習を始めた時間の振り返りで、「思うように進まない。」と記述した学習者に対し、違う方法を試してみるように振り返りシートにコメントした。すると次の時間には、複数あるワークシートの中から一つを選択して取り組んでいた。「私にはタブレットは向いていないのかもしれない。ワークシートを使った方が取り組みやすかった」と自分に合った学習方法に気が付くことができていた。このように、振り返りが次の時間に生かされるようになってきた。

(3) 授業の振り返り (成果と課題)

これまで学習への取組が思わしくなかった学習者も進んで学習に取り組み出している姿が見られた。しかし、自分の学習状況を捉えることが難しかったり、与えられた課題をこなしているだけに見えたりする姿が見て取れた。そこで、学習者が自分の学習状況や成長をモニターできるようにする必要があったと考えた。

第2段階 モニターの指標を追加

(1) ガイドラインに基づく支援

- ア 学習状況を確認できるシートを配布し、学習者が自分で進捗状況を確認しながら学習を進めることができるようにした。
- イ 学習者としてのレベルを示す指標を配布し、学習内容に対する理解や表現方法などについての自己評価を通して、自身の成長をモニターできるようにした。
- ウ 第1段階では筆者が学習計画を示したが、学習者一人一人が計画を立てるように変更した。また、これまでの自己を振り返ったり、上記の指標を基にしたりして「自己目標」を立て、それを基に振り返りを行うことができるようにした。

(2) 学習者の様子 (筆者が感じた成果と課題)

「前の単元では、全部の学習が終わらず休み時間にやらなければならないかった。でも、今度は計画を意識して学習を進めることができた。」など学習者が自分で計画を立てることでより見通しをもつことができた。また、自己目標に対する振り返りを行うようにしたことで、自身の変化や足りない点に気付くことができるようになってきた。さらに、学習状況や学習者としてのレベルの指標が常に手元にあることで、「分からないところを友達に聞きに行く」「自己評価に加えて、他者評価を進んで求めに行く」姿も見られた。一方で、時間配分のことばかりを気にしている学習者や資料を写したり要約したりしただけで満足している学習者もあり、学習活動が「調べる→まとめる」という作業的なものになってしまっていると感じた。

(3) 授業の振り返り (筆者が感じた成果と課題)

「このことについて詳しく知りたい」など個々の追究意欲から問題を設定して、自ら問題を解決する過程を歩めるようにすることで、最後まで意欲を継続させ、調べるだけで終わらず自分の考えを表現できるようにしたいと考えた。

第3段階 指標の内容を吟味

(1) ガイドラインに基づく支援

- ア 単元の始めに大まかな学習内容を全体で押さえた上で、個人で追究したい「問題」と「学習計画」を立て、それに沿って学習を進められるようにした。また、毎時間の導入で本時の自分の計画を確認する時間を確保した。
- イ 「自分の考えの表現」を意識して学習に取り組めるように、指標の項目を「自分の考えの表現」が自己評価できるものに限定するとともに、単元末にグループでの発表会を取り入れた。

(2) 学習者の様子

自分の問いをもち、計画を立てて調べることで、学習意欲をより継続できるようになっていた。「これまでは資料を写していたことが多かった。今回は、自分の考えもしっかりまとめて、班の友達に発表することができた。」「班で発表し合うことで、それぞれの考えが分かってよかった。評価し合って、自分や友達の良いところや足りなかったところが分かった。」などのようにグループで発表し、評価し合う中で、自己の成長に気が付くことができていた姿が見られた。学習へ取り組む態度の向上、自己モニター力の向上などが進み、友達との交流も充実してきた。

一方で、「個々の学びに留まっている」と感じ、協働的に学び合うことでより深い理解や表現力の向上を目指していくことが必要であると考えた。

第4段階 協働と学習者集団を育む

(1) ガイドラインに基づく支援

協働と学習者集団を育むために個人の考えをもち寄って、グループで一つの問題解決・発表用資料の作成・発表 (質疑応答を含む) に取り組むことができるようにした。

(2) 学習者の様子

グループをつくる場面では、「同じ (似たような) テーマ」で集まった方がよいと学習者たちが考え、互いに声を掛け合っていた。また、発表用の資料を作成する場面では、互いの得意な方法や関心が高かったり知識が豊富だったりすることに取り組めるよう役割分担をしている姿がたくさん見られた。さらに、教え合ったり、発表会での質疑応答を通して議論したりすることで、考えが広がったり深まったりしていく姿が見られた。

4 研究の考察

学ぶ意欲をもち、問いをもったり計画を立てたりしながら、自分に合った方法で学んでいく学習方法を習得してきていることが見て取れた。

これまで学習への取組が思わしくなかった学習者が、実践終盤には「この道具を使ってもいいですか」とより自分に合った方法に気が付き、黙々と問いに向き合う姿が印象的であった。UDLの原則に基づき、これまでの授業者中心の指導法から学習者中心の指導法へと転換していく中で、学習者が「学びのエキスパート」へと向かっていくことができていたと実感することができた。

5 今後の展望 -UDL 授業の今後に向けて-

- (1) 本実践を通してUDLに基づく学習者中心の授業づくりの一手法を示すことができた。他教科での取組、学年・学校での取組など、実践の機会を広げていきたい。
- (2) 今後は、学習者の変容を客観的に検証するための尺度の開発や「インクルーシブ教育」「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」との比較や関連性の検討が必要である。